観世能楽堂 鎮魂と復興の祈りを込めて「能と文楽」

成功した大胆な試み

能と文楽で、イエス・キリストを題材にした作品を観世能楽堂の同じ舞台で上演するのは大胆な試みだ。それが東日本大震災から3年にあたる3月11日、鎮魂と復興の祈りを込めて実現した。30年前には思いもよらない冒険だったといえるかもしれない。それぞれ芸を演じる場を守りながら、比較を試みたところに興味がもたれた。

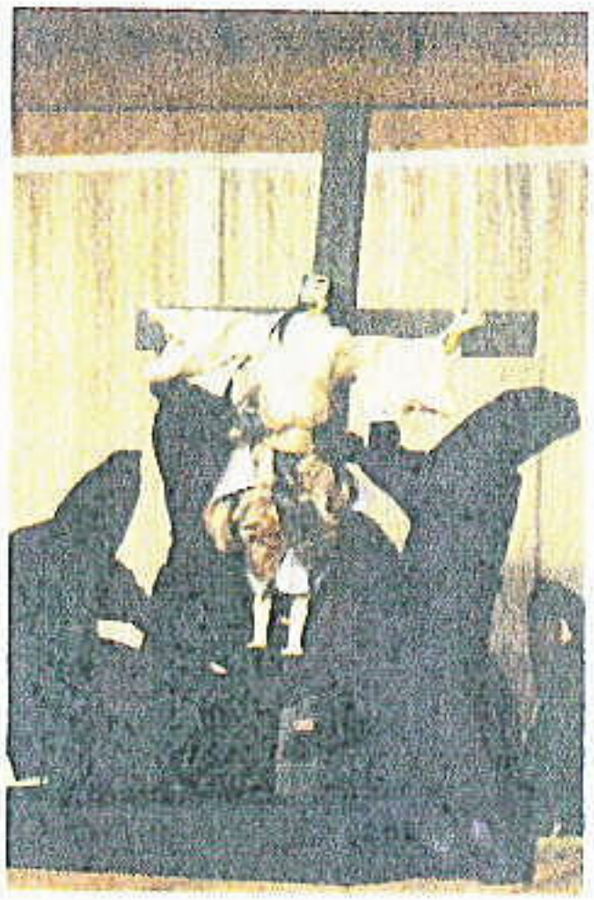
能「聖パウロの回心」は、キリスト教弾圧者だったパウロが失明し、奇跡的開眼を経てキリスト教伝道者に転じた物語。およそ400年前、宣教師らにより上演された「吉利支丹能」の復活を目指し、観世清河寿が作家・林望に台本を依頼。清河寿が一昨年の初演で演じたキリストに罪を悔い電撃的回心をするパウロ。〝神の御詩〟のように響き渡るオルガンの調べが、物語を劇的に彩る。そして能装束に「中将」の面をかけたキリストが、能「翁」のような厳かさで舞台に降臨した。

一方、「ゴスペル・イン・文楽イエスキリストの生涯」は、豊竹英大夫が平成3年から磨き上げてきた。キリストの生誕から最後の晩餐、復活までを絵巻物のようにつづる。桐竹勘十郎遣うキリストがよみがえり、義太夫節で語られる「ハレルヤ アーメン」は正にゴスペル（福音歌）。

2つの古典芸能が、鎮魂と復活の願いをキリストに重ね競演した舞台。その第一段階を成功裏に終えたことを記しておこう。11日、東京・渋谷の観世能楽堂。

（演劇評論家 藤田洋）

能「聖パウロの回心」



上と、「ゴスペル・イン・文楽」の舞台から （前島吉裕撮影）

鑑賞眼